

十一月総評 立花開

紙パックのコンスープを
鍋にそそぐ

音だけがする世界で暮らす

azusa 京都府

アルミの鍋に当たるコンスープのまろやかな音。たふたふと溜まってゆくのは、スープではなく、音なのだ。コンロの火の温度の音、スープを注ぐ器の存在の音：見えないもので構成された世界は、私たちが暮らす場所より確かであると思う。

星空を注がれてから夢見がち

飛和 長野県

星空を注がれた場所によって、「夢見がち」な度合いは変わりそうだ。例えば眼や、脳や、心。きらきらとしたフィルターが世界にかかる。心が一番いいように感じる。現実は苦しく、強い存在が犇めくばかりだから、美しい星々の光がある方が、生きていける。

耳の奥に

冬のたまごが生まれた

加那屋こあ 東京都

耳は産卵をするものだった。産みたての湯気が立つ濡れた卵が、鼓膜の付近に転がる。暗がりの中で、ころり、ころりと揺れながら、冬の冷気も知らずに温められている。何が羽化するのだろうか。産まれた頃に、春になるのかもしれない。

わたしたち蝶蝶結びだったのね

ほどけていても離れられない

りんか 埼玉県

1本の紐でつくられる蝶々結び。可愛らしく、ほとんど誰もがができる結びやすさ。だが簡易的に結んだり、バランスが悪いと非常にほどけやすい。人間関係もそうのように。けれど、壊れてみて分かったのは、1本の紐のような関係であったということ。壊れるより離れるより、終わることができないことが何より苦しい。

手にとった桃の産毛があなたより
すこし濃いから笑ってしまう

りんか 埼玉県

「桃」と「あなた」に対する主体の視点が温かい。毛まで愛おしむのは、あなたがとても大切なのだろう。相聞の切り口は多く、独特であるほど主体とあなたの世界は濃くなる。桃を主軸に置きながら、あなたを描く。産毛という細部にいたるまで、どこまでもあなたを見つめる。

地球儀のなかはめこめない謝肉祭

ちねんひなた 沖縄県

謝肉祭は地名ではなく行事ごとなので、地球儀に載ることはない。が、謝肉祭を見た主体には、国となりそうなエネルギーを感じたのだろう。ファンタジー的に「地球儀を見ていたら謝肉祭があった」と組み込むのではなく、あくまで現実ベースでの角度からの描写がエネルギーの勢いを殺さず描いている。

夢を見た

君がいた

目が覚めた

君を置いて来てしまった

川原 尚悟 宮崎県

もう夢でしか会えない「君」なのだろう。現実で手を離れた決断と、心の底に眠る本心は違った。別離か死別かは読めないが、想いは全て自身の想いでしかない。目覚めたときの罪悪感さえ「君」とはもう関係のないもの。けれど、繋がっていたのにという前提を心が手離せない。ぼつぼつと独り言のような語り口が目覚めの孤独を浮き彫りにさせる。

髪の香の向うのひとに貸すカフカ

白鳥 陽太 神奈川県

君と主体の間に「髪の手」があるという感性が美しい。香りが気配より強いものとして認識されており、光を浴びるように君がより一層輝いている。恋をしているのだとわかる。本の貸し借りができるような親密な間柄だが、髪の手を挟んでいるという奥ゆかしさが良い。勢いだけの恋ではない。

人生に爪を立てても痛いのは私

千手観音さま、五千本の指で

夜をくすぐって

いもといちろう 埼玉県

人生はしがみついても落ちていく時がある。五指の爪を立て、痛い痛いと思いながら生きる。千手観音ほどの指があれば、もしかしたら落ちないのかもしれないが、持つものは足搔かず、暇つぶしに夜をくすぐる。そんな姿を思い浮かべても、ひがまず祈りのように考える。痛みの先に救いを信じ続ける姿。

水かきの無い手

宇宙に戻る体温

少しずつ忘れることが

どうして必要だったか

回る卵 宮城県

死別のことを書いた作品だろうか、と感じた。手がかりとなるものは少なく、「水かきの無い手」など、主体のみが分かる部分は粗削りではあるが、「宇宙に戻る体温」「少しずつ忘れる」など、触れられない場所へいった何かを感じさせる。なぜ必要かと問われたら、自分が生きるためであることは分かっている。心が理解に至れないのだ。混ざり合う体温の片割れが、宇宙へと戻ってしまったこと。